

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。この話の山は「飽く (=腹いっぱい食べる)」の意味、願望の「いかで〜む」、そして⑫「飽かせ給はぬ」(尊敬)と⑭「飽かせ奉らむ」(使役)の「せ」の見分けです。

ひっかけ 「舌打ちをして」は不満で舌を鳴らすことではなく、舌鼓を打つこと。うまそうに味わっている場面だと押さえておきます。

あらすじ =利仁の將軍は、若いころ当時の最高権力者(一人の人)の屋敷に侍として仕え、越前の有力者・有仁の婿となって越前に住んでいた。正月、その主君の屋敷で大饗が開かれる。当時は宴が終わると、残り物をあさりに来る者は追い返し、お下がり(屋敷の侍たちが食べる)になっていた。その席で、下級の侍である五位が芋粥をすすりながら「ああ、なんとかして芋粥を飽きるほど食べてみたい」ともらす。これを聞いた利仁が「まだ飽きるほど召し上がっていないのですか」「では飽きるほど召し上がらせてさしあげよう」と申し出、五位は「それはありがたいことです」と答える。ここから物語が動き出す。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

【冒頭(利仁と五位の紹介)】

①今は昔、利仁の將軍といふ人ありけり。若かりける時は、その時の②一人の人の御もとに、③恪勤にてなむ候ひける。越前国に有仁といひける④勢徳の者の聳にてなむありければ、⑤常に彼の国にぞ住みける。

【大饗の場面】

しかる間、その主の殿に、正月に⑥大饗行はれけるに、⑦そのかみは、大饗⑧はてぬれば、⑨取食といふ者をば追ひて入れずて、大饗の⑩おろしをば、その殿の侍どもなむ食ひける。

【芋粥のやりとり】

この五位、その座にて、芋粥をすすりて、舌打ちをして、「⑪あはれ、いかで芋粥に飽かむ」と言ひければ、利仁これを聞て、「大夫殿、いまだ芋粥に⑫飽かせ給はぬか」と言ふ。五位、「⑬いまだ飽き侍らず」と答ふ。利仁、「いで、⑭飽かせ奉らむ」と言へば、五位、「⑮いとかしこきことなり」と言ふ。

語注 利仁の將軍=藤原利仁(ふじわらのとしひと)。平安時代前期に実在したと伝わる武人。御もと=おそば。お屋敷。越前の国=今の福井県の北部あたり。有仁=有力者で、利仁の妻の父にあたる人。聳=婿。婿として妻の家に入ること。彼の国=あちらの国。しかる間=そうしているうちに。その主の殿=利仁が仕えていたの屋敷。取食=読みは「とりばみ」。大饗の残り物をあさり取りに来る者。大夫殿=「大夫」は五位の身分の人をいう語。「大夫殿」で五位への呼びかけになる。五位=「五位」は人名ではなく、この主人公の通称。主君の屋敷に仕える下級の侍。芋粥=山の芋を甘葛(あまづら)の汁で煮た、当時のごちそう。舌打ち=舌鼓(しづみ)を打つこと。うまそうに舌を鳴らすようすで、現代語の「不満で舌を鳴らす」意味ではない。いで=さあ。それでは。※「恪勤」「勢徳の者」「大饗」「そのかみ」「飽く」「かしこし」は意味を答える問題があるので、ここでは意味を示さない。※本文は『今昔物語集』巻二十六第十七話(利仁將軍 若き時、京より敦賀に五位て行く語)の初めの部分。ほぼ同じ話が『宇治拾遺物語』にもあり、本によって言い回しが違う。お使いの教科書の本文に合わせて読むこと。※この抜き出した範囲は位を紹介する一文が省かれているため、「この五位」といきなり出てくる。そのため、冒頭の見出しにある「五位の紹介」にあたる部分は、この範囲には入っていない。見は元の記事のままにしてある。

A 語句の意味と読み (1～7)

- (1) ③ 「恪勤にてなむ候ひける」の「恪勤」の読みと意味を書け。
- (2) ④ 「勢徳の者」の意味を書け。
- (3) ⑥ 「大饗行はれるに」の「大饗」の読みと意味を書け。
- (4) ⑦ 「そのかみ」の意味を書け。
- (5) ⑩ 「おろし」の意味を書け。
- (6) ⑪ 「あはれ、いかで芋粥に飽かむ」の「飽く」の意味を書け。
- (7) ⑮ 「いとかしこきことなり」の「かしこし」の意味を書け。

B 文法 (8～13)

- (8) ③ 「恪勤にてなむ候ひける」の「なむ」の種類を答え、結びの語とその活用形も書け。
- (9) ⑤ 「常に彼の国にぞ住みける」の「ぞ」の働きを答え、結びの語とその活用形も書け。
- (10) ⑥ 「大饗行はれるに」の「れ」は何の助動詞の何形か。文法的意味もあわせて書け。
- (11) ⑧ 「はてぬれば」の「ぬれ」は何の助動詞の何形か。また「ぬれば」全体はどのような意味になるか書け。
- (12) ⑪ 「あはれ、いかで芋粥に飽かむ」の「いかで」と「む」は、ここではそれぞれどのような意味を表しているか。
- (13) ⑫ 「飽かせ給はぬ」と⑭ 「飽かせ奉らむ」の「せ」は、それぞれ何の助動詞で何を表すか。見分けの決め手もあわせて書け。

C 主語・指す内容・敬意の方向 (14～17)

(14) ② 「一の人」とは、どのような人物を指すか。簡潔に書け。

(15) ③ 「恪勤にてなむ候ひける」の「候ふ」は、誰から誰への敬意を表しているか。

(16) ⑬ 「いまだ飽き侍らず」の「侍ら」は何の敬語か。誰から誰への敬意かもあわせて書け。

(17) ⑭ 「飽かせ奉らむ」の「奉ら」は、誰から誰への敬意を表しているか。

D 口語訳 (18～21)

(18) ⑪ 「あはれ、いかで芋粥に飽かむ」を口語訳せよ。

(19) ⑫ をふくむ「大夫殿、いまだ芋粥に飽かせ給はぬか」を口語訳せよ。

(20) ⑭ 「飽かせ奉らむ」を、「せ」と「奉ら」の働きがわかるように口語訳せよ。

(21) ⑮ 「いとかしこぎことなり」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ⑦「そのかみ」とあるが、当時、大饗が終わったあと⑨「取食といふ者」はどのように扱われ、⑩「おろし」は誰が食べることになっていたか。本文に即して説明せよ。

(23) ⑪「あはれ、いかで芋粥に飽かむ」という言葉には、五位のどのような境遇や心情が表れているか。説明せよ。

(24) ⑫「あはれ、いかで芋粥に飽かむ」は、この話の中でどのような働きをしているか。⑭「飽かせ奉らむ」とのつながりにふれて説明せよ。

(25) ⑫と⑭を並べたとき、五位と利仁はどのような点で対比的に描かれているといえるか。説明せよ。

F 文学史 (本文全体をふまえて答える) (26～28)

(26) ①「今は昔」で始まるこの文章は、『今昔物語集』から取ったものである。この作品の説話は、末尾をどのように結ぶことが多いか書け。

(27) この文章の出典『今昔物語集』について、成立したおおよその時代と、どのような種類の作品かを書け。

(28) この芋粥の話は、大正時代のある作家が短編小説に書き直したことで広く知られている。その作家名と作品名を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「飽く」は「あきる」ではない。「十分に満足する＝腹いっぱい食べる」。⑪の願いも⑫⑬⑭の会話も、ここを取りちがえると全部逆の意味になります。②「せ」の見分けが最大のヤマ。⑫「飽かせ給はぬ」の「せ」は尊敬、⑭「飽かせ奉らむ」の「せ」は使役。決め手は下に続くのが尊敬の「給ふ」か、謙譲の「奉る」か。「奉る」の上の「せ」は使役と決まります。「せ給ふ」のときだけ、食べさせる相手が別にいるかを見る (⑫は食べるのが五位自身なので尊敬)。③傍線で問われる係り結びは③「なむ…ける」と⑤「ぞ…ける」(どちらも結びは連体形。係助詞がなければ文末は終止形「けり」)。本文にはほかに「侍どもなむ食ひける」(同じくなむ…連体形)と、「聳にてなむありければ」(「ければ」に続くため結びが流れる＝結びの消滅)もあります。「すべて指摘せよ」と問われたら4つ全部を見ることが。